障子を立候也、

臺子飾

按ズルニ、此他茶杓蓋置等々諸器物ヲ所望シテ見ル事アリ、今省略ニ従フ、

〔茶話指月集上〕一ある時蒲生飛驒殿長岡幽齋翁両人、利休所にて茶湯過て後、蒲生殿千鳥の香爐所望あり、休無興のていにて香爐をとり出し、灰を打あけころばし出す、幽翁清見潟の歌の心にやと御申候べば、休氣分なをりいかにもさやうに候との返事なり、順徳院御百首の中に、

清見がた雲もまよはぬ浪のうへに月のくまなるむら千鳥かな、このこゝろばへの茶湯おもしろく仕舞たるに、なんぞや無用の所望かなとおもはるゝより、村千鳥を香爐に比したるなるべし、すべて何事も興の過たるはあしゝ、ことたらぬ所に風流餘りある理、古き書にも見え侍る、

〔臺子ゑき茶やうの時かざり樣の事〕一臺子の置樣は別書にあり、ゑきゑやうにかざる時は、茶入、茶碗其外いづれも唐物名物ならではなるまじき事にてあり、かざり樣は常のごとく、ふくろ、水指、水こぼし、ひゑやく立の置樣は、ふろのきめんを臺子のはしらの内のかどの通を一すぢに置なり、水指もとつ手のををりを一通りに置なり、ふろと同前なり、ひゑやく立は、ふろと水さしとのまん中のさきの方に置、ひゑやくをさして置なり、水こぼしひゑやく立の中前に置なり、ふたの置は水こぼしの中に入て置なり、いづれも此ぶんは常にかはる事なし、茶入は盆にのせて、臺子の上にまん中に一ッ置なり、およそこのゑづのごとし、○圖略

一ゑきゑやうの時は、茶せん置とて別にあり、茶せん、茶きん、さゝく、此三色を入て、茶たつる時もちていづる也、茶きんを四ッにおりたゝみ、茶せんを其上に置、さゝくはあをのけて置なり、

一茶入を置に、のせ床の右の方へよせ、かざり置事もあり、地ゑきいより七寸五分、床がまちより盆の間、たゝみの目廿一めよし、